

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	1	○ 基礎的・基本的な知識及び技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、主体的に学習に取り組む態度の涵養
目標(評価規準)		①【学習態度】授業規律を守り、粘り強く学習に取り組んでいる。 ②【対話的な学習】自分の考えをもち、他者との対話を通して考えを深めている。 ③【見通しと振り返り】「見通し」をもって授業に臨み、単元終了後などで「振り返り」を行っている。 ④【自学自習】家庭での学習に自ら取り組んでいる。
重点に係る現状 設定理由		学習指導要領の「確かな学力の育成」を踏まえ、学習に対する目標を明確化・具体化し、その意義を踏まえながら向上心をもって粘り強く取り組む生徒の育成を家庭との連携のもとでめざしたい。

評価資料	評価
教職員アンケート結果 (具体的方策ごと)	①学習態度について、肯定的な回答は100%だった。教員間での議論から、校内研究をはじめとする教員の日々の取組の成果が表れている、という意見が聞かれた。 ②対話的な学習について、昨年度の80.0%に引き続き、今年度も81.0%と高い値を示している。 ③見通しと振り返りについて、これまで増加傾向だったのが、昨年度と比較すると-3.0%の微減だった。ただし、生徒や保護者も含めて比較すると、最も高い値を示した。 ④自学自習について、昨年度とさほど変化はなかった。なお、生徒や保護者も含めて比較すると、教員が最も高い値を示した。特に1年生保護者と比較すると、+26.2%の差があった。
各アンケート等の結果	①学習態度について、生徒の肯定的な回答の平均が90.3%と高い値を示した。また、2・3年ともに、肯定的な回答について昨年度の約75%より大幅に上昇した。生徒と保護者とは、全学年において生徒の方が高い値を示した。特に1年生の生徒は、保護者と比較すると+23.8%と大きな開きがあった。 ②対話的な学習について、生徒の回答では肯定的な回答の平均が88.8%と高い値を示した。また、全学年での生徒の「×(そう思わない)」と答えた人数は極めて低く、1・2年生では0人であった。その他、生徒と保護者との肯定的な回答を比較すると、全学年において生徒の方が高い値を示した。 ③見通しと振り返りについて、2・3年の生徒・保護者すべてで昨年度より上昇した。最も上昇したのは2年生保護者で、昨年度と比較すると+16.4%となった。 ④自学自習について、生徒、保護者ともにおおよそ50%の値となった。特に3年生では、昨年度より+24.0%と増加した。
自己評価結果 (見解と改善方策)	①学習態度について、前述したように研究推進の成果であったり、単元ごとの振り返りの実施や生徒の実態に応じた難易度別ワークシートの作成などであったりが、実践として有効であったと考えられる。 ②対話的な学習について、例えば次のような実践について効果があったと思われる。 ・日常的に少人数グループで授業を進め、生徒同士で話し合いながら活動させる。 ・自分の考えを伝えることが苦手な生徒への配慮をしながら、グループワークを実施する。 ・課題設定を工夫してグループワークを取り入れる。 ③見通しと振り返りについて、例えば次のような実践について効果があったと思われる。 ・単元の導入において、スライドを活用し、学習内容や仮説のイメージを提示・分析させる。 ・振り返りシートを定期的に見直し、改善を図る。 ・単元の中間段階で振り返りを行い、習得状況を確認し、できるようになってから単元を終える。 ④自学自習について、塾からの帰宅時間が遅いため、家庭学習の時間を十分に確保できていない様子が見られた。また、3年生においては高校受験という目標の影響が大きいと考えられた。
学校関係者評価結果	学校関係者評価委員会の皆さんには、協議の前にまず実際に授業を見学していただいた。その感想から、「発言が少なくても、他者のやり取りから学ぶ生徒がいる」「様々な個性が認められる土壌が大切」「何のために学ぶのかを意識させたい」などの意見をいただいた。また一方で、「対話の質を高め、与えられる教育から自ら考える教育へ」と授業改善への視点も示された。
最終改善方策	①学習態度について、アンケートでは肯定的な意見が多く見られたが、今後は学習に困難を抱える生徒へのフォローを一層充実させたい。特に、現在は机間指導や挙手への対応等には日常的に取り組んでいるが、今後は個別指導の充実や授業の魅力の発信にも努めていく。また、学習方法が十分に身に付いていない生徒が見られるので、具体的な学び方の指導を一層充実させていく。 ②対話的な学習について、学校全体で単元や学習課題を踏まえながら、計画的に対話的な学習を取り入れていく。また、教科打合せや日常の授業参観を通して、教員間においても積極的に対話を行い、情報交換を推進していく。 ③見通しと振り返りについて、見通しをもたせる時期や振り返りの実施方法について職員間で情報交換を行い、授業力の向上を図っていく。 ④自学自習について、例えば以下のような取組を実践していく。 ・何のために学ぶのかや、学習の目標等について問いかけ、目的意識を育成していく。 ・家庭学習の定着に向け、各教科等において、学習方法の指導をさらに充実していく。 ・家庭との連携・協力を一層深めていく。 ・教員間でも、過去の資料(スライド、単元指導計画、振り返りシート、ワークシート等)を共有し、活用を図る。 ・始業式・終業式等において、学習指導に関する話を行う。

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	2	○ 自己肯定感をもち、互いに協働しながら、持続可能な社会の創り手となるようとする生徒の育成
目標（評価規準）		①【自己肯定感】自分のよいところに気づき、自己の特性を活かしながら諸活動に取り組んでいる。 ②【人権感覚の醸成】人権感覚を身に付け、他人や社会との関わりの中で実践している。 ③【集団生活の向上】集団の一員として協力的な言動をとっている。 ④【他者への貢献】よりよい学校生活・持続可能な社会を築くために、自分で考え、行動している。
重点に係る現状 設定理由		本校における人権教育の取組を継続しながら自己肯定感を育むとともに、多様な他者と協働する様々な集団活動（授業や行事等）を通して、よりよい学校生活や持続可能な社会を築こうとする資質・能力を育成したい。

評価資料	評価
教職員アンケート結果 （具体的方策ごと）	①自己肯定感について、自由記述をテキストマイニングで分析したところ、「生徒」が最も大きく示された。また、昨年度から継続して「褒める」も大きく示された。 ②人権感覚の肯定的な回答について、生徒や保護者も含めて比較すると、教職員が最も高い値を示した。特に3年生生徒と比較すると+18.9%、また昨年度の教職員の回答と比較すると+7.2%の値を、それぞれ示した。 ③集団生活について、昨年度に続き、3年連続で100%の値を示した。 ④他者への貢献について、生徒や保護者も含めて比較すると、教職員が最も高い値を示した。特に3年生生徒と比較すると+27.6%の値を示している。
各アンケート等の結果	①自己肯定感について、「よいところはどんなところだと思っていますか。」という問いに、生徒と保護者共に、1年生では「優しい」、2年生では「取り組み」と、共通したキーワードが見られた。また、全学年の保護者から、「優しい」がキーワードとして見られた。 ②人権感覚について、2・3年生では、保護者の方が生徒よりも高い値を示した。また、特に全学年保護者の「×（そう思わない）」と答えた人数は極めて低かった。生徒の2・3年生の回答では、それぞれにおいて昨年度より上回った。 ③集団生活について、すべての学年の生徒・保護者で肯定的な回答が90%以上という高い値を示した。特に1・2年生の生徒はともに98.8%という高い値を示しており、「△（あまりそう思わない）」「×（そう思わない）」と答えた人数は極めて低かった（1名以下）。 ④他者への貢献について、すべての学年において保護者の方が生徒より高い値を示したが、そこまで大きな差は見られなかった（+5%程度）。また生徒の肯定的な回答について、2・3年生それぞれ昨年度より上回った。特に3年生では昨年度と比較して+17.6%を示した。反面、保護者では昨年度より若干の低下が見られた。
自己評価結果 （見解と改善方策）	①自己肯定感について、学年経営で「誰かのために」を意識して実践してきた結果、それに関連する言葉の使用が増えた。また、現3年生で昨年度は「わからない」と回答する生徒が多かったが、現在は具体的な言葉で自己内省ができるようになった。その他、学年が進むにつれて、自己に関する内容から他者との関わりに関する内容へと広がりが見られた。 ②人権感覚の育成について、昨年度に比べ、教員一人ひとりが人権（よさを認め合うこと）を意識した取組が増加した。その結果として、全体として数値の向上につながったと考えられる。 ③集団生活について、学校行事や学年行事、レクリエーション等、集団で取り組む機会を多く設定したことが、今回の結果につながったと考えられる。 ④他者への貢献について、2年生の総合的な学習の時間では、地域をより良くするための授業を実施することができた。また、教職員アンケートの質問項目にある「自治能力」について、対象を学校内に限定して捉える意識が強いと考えられるので、地域にも視野を広げて指導をしていく必要があると考えられる。
学校関係者評価結果	学校評議員会では、学年が上がるにつれて、関心が個人から周囲へと広がっている様子が見られたとの意見があった。また、社会に出た際には他者との交流が重要になることから、他市や他の中学校とのふれあいの機会を設けてはどうかとのご提案をいただいた。さらに、合同部活動等の取組を通して、認め合う姿勢が育つのではないかとのご意見をいただいた。
最終改善方策	①自己肯定感を育成するため、行事の計画やまとめ・反省の場面において、人とのつながりを意識させる働きかけを行っていく。また、「自ら」を挙げた生徒が少なかったことを踏まえ、生徒が「自ら」一歩を踏み出せるような働きかけを充実させていく。 ②人権感覚について、教員の意図がこれまで以上に伝わるよう、各場面において、こまめに価値づけを行いながら取組を進めていく。 ③集団生活について、これまでの指導に一定の効果があつたと考えられる。今後も本方針を継続するとともに、新たな視点や指導方法を積極的に取り入れていく。 ④他者への貢献について、「地域社会」という語の捉えが広く、生徒や保護者にとって具体的なイメージがもちにくかったと考えられる。日常的に、例えば「地域の見守りの方にあいさつができましたか」など、より具体的なキーワードを用いて問いかけながら指導に取り組んでいく。

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	3	○ 基本的な生活習慣を定着させ、よりよい人間関係を形成しながら、自己実現を図ろうとする生徒の育成
目標（評価規準）		①【規律・礼節】秩序や規律のある生活を送るために、さまりの意義を理解し、礼節をふまえ、時と場に応じた言動をとっている。 ②【安心・安全な生活】暴力や暴言、いじめのない、安心・安全な生活を送っている。 ③【望ましい人間関係の構築】互いの人格と個性を尊重し、よりよい人間関係を築いている。 ④【生き方としての進路】自分のよさを発揮するための主体的な進路選択を通して、自己実現を図ろうとしている。
重点に係る現状 設定理由		睡眠時間をしっかりと確保することや朝ご飯を食べること、SNSの正しい利用などの基本的な生活習慣を基盤としながら、よりよい人間関係を形成し、有意義で充実した学校生活を送る中で、現在および将来における自己実現を図っていくことができるようにしたい。

評価資料	評価
教職員アンケート結果 (具体的方策ごと)	①規律・礼儀・あいさつについて、肯定的な回答は昨年度に引き続き100%の値を示した。 ②安心・安全な生活について、生徒や保護者と比較すると最も高い値を示している(100%の値)。 ③望ましい人間関係に関わる肯定的な回答について、「生徒と大人との関係」構築の指導については100%だった。また、「生徒同士の関係」構築の指導については95.2%と昨年度の76%より上昇した。 ④生き方としての進路について、昨年度は肯定的な回答が100%だったが、今年度は85.7%と下降した。
各アンケート等の結果	①規律・礼儀・あいさつについて、全学年の生徒・保護者で86%を超える肯定的な値を示した。特に2年生の保護者は96.6%と高い値を示した。また、全学年の生徒・保護者について、「×(そう思わない)」と回答した値は極めて低く、それぞれ2名以下であった。 ②安心・安全な生活について、全学年の生徒・保護者の肯定的な回答が88%を超えた。特に2・3年生の生徒は95%を超える値を示した。また、2年生生徒、1年生保護者では0人が「×(そう思わない)」と答えた。その他生徒の回答について、2・3年生それぞれ昨年度より上回り、2年生は+15.6%、3年生は+27.5%と増加した。 ③望ましい人間関係に関わる肯定的な回答について、「生徒と大人との関係」では、全学年の生徒・保護者について、(1年生生徒(85.9%))を除き91%を超える値を示した。また、「生徒同士の関係」では、すべての学年で生徒の方が保護者より高い値を示した。特に1年生では、生徒が保護者より+8.5%の高い値を示した。 ④生き方としての進路について、すべての学年で、生徒より保護者の方が高い値を示した。特に2年生の保護者は、生徒と比較すると+15.5%という高い値を示した。また、昨年度との肯定的な回答を比較すると、特に2・3年生について、生徒保護者ともに、すべての対象で昨年度より上回った。
自己評価結果 (見解と改善方策)	①規律・礼儀・あいさつについて、まず言葉遣いについては、入学当初は小学校での習慣が残る様子も見られたが、学年の進行とともに成長が見られ、適切に言葉遣いを用いることができるようになった。また、挨拶については、教員による指導の強化を通して、生徒が自ら考えて行動できるようになってきている。 ②安心・安全な生活について、教職員の指導に対して、多くの保護者が理解を示していることがわかった。また、△や×を付けた生徒は何らかの問題意識を抱えている結果だと考えられるので、その思いを丁寧に受け止めていく必要がある。また、いじめの未然防止については、毎週実施している「水曜アンケート」により友人関係の悩みや第三者からの情報を得たり、生徒指導メモにより職員間での情報共有ができたりと一定の効果があったと思われる。 ③望ましい人間関係について、心を開くことが難しい生徒が見られるので、よく注意して関わっていく必要がある。特に生徒同士の関係について、生徒が抱える問題が年々複雑化・深刻化している現状を踏まえつつ、「抱えている問題が大きく、友人に相談した際の反応が不安である」と感じている生徒への支援により力を入れていく必要がある。 ④生き方としての進路の授業内容について、家庭への周知が十分ではなかった。反対に、学年が進むにつれて、生徒・保護者ともに進路学習への意欲が高まる傾向が見られた。
学校関係者評価結果	学校評議員会では、中学校では多くの教員が関わっている強みを生かしていくことが大切であるとの意見があった。また、失敗を否定的に捉えるのではなく、振り返りを通してどう変わり、どう次に進めていけるかが重要であるとの指摘があった。さらに、「相談できる人がいない」という回答についても、SOSを出せる環境を整えることがより重要であるとのご意見をいただいた。
最終改善方策	①規律・礼儀・あいさつのうち、特に規律の意義について、教職員で共通した説明ができるよう共通理解を図り、一丸となって指導に当たっていく。 ②安心・安全な生活で、いじめの未然防止については、今後も「水曜アンケート」や生徒指導メモ、教員からの「いじめは許されない」という声掛けを継続して行うとともに、生徒からも同様の声がかかるよう指導していったり、問題の未然防止についてさらなる研鑽を積んだりしていく。その他、全ての保護者から指導への理解が得られるよう、生徒への働きかけに加え、保護者との関係づくりを意識して取り組んだり、生徒会や委員会等を活用し、生徒自らが注意喚起できる集団を育成したりする。 ③望ましい人間関係について、生徒と保護者とのより良好な関係づくりに向けて積極的に関わっていく。また、心を開くことが難しい生徒への指導スキルの向上に努めるとともに、教員が気になる生徒に対して積極的・継続的に声掛けを行い、生徒・保護者双方から相談されやすい関係の構築を図る。また、「生徒同士の関係」については、友人に相談できない悩みを抱えている可能性のある生徒とのコミュニケーションを一層重視していくとともに、友人や大人ではなくAIに相談する生徒の増加も想定されることから、生徒同士が対面で対話できるような関係づくりを支援していく。 ④生き方としての進路について、以下のような実践を充実させていく。 ・授業内容について、学級通信等を活用し、これまで以上に家庭へ発信していく。 ・進路や職業など生き方について学ぶ機会を確保するため、職場体験を継続して実施していく。 ・1年次から将来の展望を意識できる授業を展開するとともに、保護者の授業参加も促していく。